

	<p>2013年 7月15日 第97号</p> <p>発行：いたばし水と緑の会 事務局</p> <p>年会費 2,000 円 郵便振替 00170-8-352508 いたばし水と緑の会  <a href="http://homepage3.nifty.com/mizutomidorinokai/">http://homepage3.nifty.com/mizutomidorinokai/</a>        E-mail : <a href="mailto:mizumidori@nifty.com">mizumidori@nifty.com</a>        〒174-0063 板橋区前野町 5-31-7 瀬田方 tel&amp;fax3969-7124</p>
---	--

## 板橋区付近の自然はどう変わった？(2)

### (9)スズメ

栄町の自宅付近で最も多く見られる鳥はスズメである。これは昔も今も同じである。定量的な調査の結果ではなく、単なる私個人の感想ではあるが、最近東京ではスズメが減ったという話が多い。昔に較べれば栄町付近でも減ったのかもしれないが、どうも実感が湧かない。

数年前山仲間のSから“最近家の周りではスズメがいなくなってしまった”という話を聞いた。Sの自宅は町田市にある。その頃昆虫を調べるため狭山丘陵を訪ねた。Sの話聞いた直後だったのでスズメにも注意が向う。駅を降りて多摩湖の南岸にある東大和市の住宅街を通り抜ける。屋敷町という雰囲気な敷地には大木が多い。まさに森の中の町である。メジロ、ヒヨドリは飛んでいるが、スズメは、一羽も見られない。Sが住む町も古くからの屋敷町で樹木が鬱蒼と生い茂っている。屋敷町を通り過ぎ、草地や畑が出てくるとスズメも目に付くようになる。

スズメが属するハタオリドリ科はアフリカで繁栄するグループで、サバンナ的な環境を好むという。自然草原がほとんどない日本ではスズメが住む最良の環境は農村である。人が住んでいない深い山中でスズメを見た記憶はない。スズメが日本に侵入したのは農耕が始まった弥生時代以降であろうという説は、多分本当なのであろう。

1990年代末ごろから再び板橋区の自然に興味が向うようになった。久しぶりの荒川河川敷、枯草の原にスズメの大群がいた。数百羽のスズメに少数のカワラヒワ、野生化したセキセイインコも数羽混じっている。一斉に飛び立つ時、体が大きいセキセイインコがいつもラストになるのが面白かった。ここ数年荒川河川敷のスズメの群が大分小さくなったような気がする。せいぜい数十羽、カワラヒワなどの他種の鳥が混ざった群れも見かけない。そういえば昔、赤塚や徳丸でよく見かけたスズメの群も最近は見ることがない。秋の夕暮れ時、藪の一角に無数のスズメが集まり、やかましく鳴いていた光景も見られなくなってしまったようだ。

板橋区全域としては昔に較べスズメは減っていることは間違いないであろう。スズメの餌場、雑草が茂った空き地も無くなり、人の家の造りもスズメが巣を作るのに向かなくなった。スズメが街の中にはいなくなってしまう時代が来るのであろうか。

昭和30年頃まで、あちこちの空き地に古煉瓦が散らばっていた。工場などの煉瓦塀が取り壊された時に出た廃材であろう。この煉瓦を使ってスズメ捕まえるワナを作るのである。4個の煉瓦を地面に並べ、5個目の煉瓦を蓋にして、細い木の枝で支える。中には米粒などを撒き、誘き寄せられたスズメは小枝を羽で引っ掛け、蓋が落ちるといふ寸法である。スズメが賢かったのか滅多に掛からなかったが、掛かっても取り出すときにほとんど逃げられてしまった。

霞網の使用は昭和30年代には禁止されていたが、販売は制限されていなかった。値段もたい

して高くなかったのであろう。中学生の時、同級生のAが霞網を手に入れ、スズメを捕りに行こうと誘ってきた。徳丸が原の一角、現在大東文化大学がある辺り、稲の取入れが終った田んぼに霞網をはった。見晴らしの良い田んぼの真ん中の網に掛かるような間抜けなスズメはいない。夕暮れ時、北野高校の校庭と斜面の雑木林に挟まれた細い道をとぼとぼと歩き、東武練馬の駅へ向かった。(釣巻岳人)

## ウナギについて

ニホンウナギが絶滅危惧種になるかもしれないという。板橋区の自然とは離れてしまうが、この際ウナギの思い出話を書き残しておきたい。もちろん食べた話ではない。

昭和32年頃の夏休、鎌倉へ行った。小さな川が海に流れ込んでいる所で、記憶ははっきりしていないが稲村ガ崎か由比ガ浜のどちらかである。干潮になると川岸に小さな水溜りができる。この水溜りに小さなウナギが取り残されている。ドジョウより細長い「クロコ」と呼ばれる状態のものである。動きは素早く、タモですくっても這い出して逃げられてしまう。ドジョウとの違いを身を持って知らされた。たまに体長が20cmぐらいのものも混じるが、一層素早くタモに入れることすら出来ない。

やはり昭和30年代前半、神奈川県中央林間での体験である。今はすっかり住宅街になってしまったが、当時は水田と雑木林の地であった。斜面の雑木林と低地の水田の境に溜池が多かった。この溜池の水を抜いて魚を捕ろうというのである。父の友人の当地在住の人に誘って頂いたのである。今思うと溜池の持ち主の許可を得ないで、勝手にやってしまったのではないかという気もするがもう確かめようもない。

溜池と田んぼの境の土手を鍬で掘り崩し、溜池の水を抜く。フナやコイ、色んな雑魚が背びれを見せ、右往左往している。これを泥まみれになりタモで掬う、実に楽しい。水が全部抜けてしまうと泥の中でクネクネしているウナギも数匹見つかる。体長は20~30cmぐらいであろう。フナやコイは溜池の持ち主が雑魚を入れたのであろうが、ウナギは多分細い水路を伝い自力でここに辿り着いたのであろう。

1980年代、私の友人が浦安に住んでいた。この友人の知り合いが旧江戸川の妙見島の辺りで、塩ビパイプを束ね川底に沈めウナギを捕っていた。多く入るのは「メソッコ」と呼ぶ小さなウナギだったが蒲焼サイズのものも入るといふ。当時今井橋のたもとには天然ウナギを出す食堂があった。敷居が高い鰻専門店ではなく、大衆食堂という雰囲気であった。

現在中板橋のスーパー「よしや」がある場所に、小学生の同級生Mの家が経営する魚屋があった。店員が鰻を捌くのを飽きずに見入っていた。鰻を掴み、目釘を頭に刺し、一気に腹を割く、その手つきを見るのが楽しみであった。

子供の頃、鰻を食べた記憶はない。蒲焼の香を嗅ぎ、弁当を食べるといふ落語「長屋の花見」のような漫画があった時代である。鰻は高級品だったのである。鰻の漁獲量をみると1970年頃が天然、シラス共にピークである。鰻の名店が出現するのは18世紀後半、養殖の始めは明治10年代、シラスウナギを使う現在に続く養殖が始まるのは大正時代である。天然の鰻がまだ多かった時代に名店が出現し、養殖も始まっている。これは多分漁獲方法の問題であろう。「おいてけ堀」にある夜釣り、穴釣り、置針が江戸時代からの主な鰻の漁獲法である。富山和子氏が書いているキモに釣り針が残っている話は近年でも天然鰻の捕り方は変わっていないことを裏付ける。鰻は沢山いても漁獲方法の効率が悪く、鰻は高級品になったのであろう。(釣巻岳人)

# 白子宿界隈の湧水

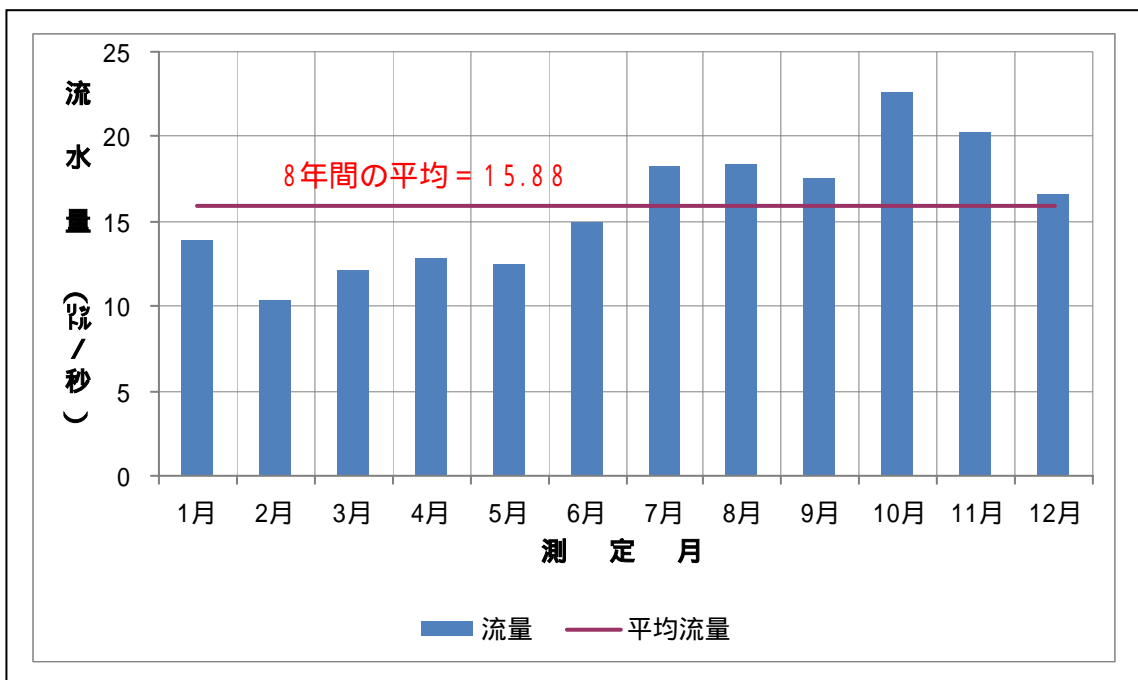
表題の白子宿とは字名的な地区の呼び名で、白子二丁目のうち主として東埼橋から寺前橋の間を指し、この地区は白子でも湧水の豊富な所です。それは、白子宿が武蔵野台地と白子川左岸の低地が接する崖線に沿って位置していること、武蔵野台地の主要構で、かつ帯水層でもある武蔵野礫層が崖線に露頭していること、湧水となるための涵養域が比較的広いこと、などが考えられます。その湧水も近年はだいぶ様変わりしてきています。川越街道を成増から和光方面に向かい、東埼橋を渡って旧川越街道を直進すると登り坂にかかります。この登坂道の側溝流水は、降雨直後の地表水が流れ込むのを除けば、そのほとんどは湧水と言っても過言ではなく、今日でも登坂の中間部よりやや成増寄り、下り車線側の駐車場際の土側溝には清冽な湧き水が常時流れており、『金魚鉢の水に』と言って成増から定期的に採水に来る人がいます。また、サワガニ、ヤゴ、プラナリヤ、などの生物も確認していますが、湧水途出口の水であっても飲料水としては保健所が『NO』とっています。ここには数十年前までは湧水を貯留する水槽があり、この水を使って近隣の農家の方が野菜などを洗う『洗い場』があったそうです。下の写真は旧川越街道の切通しと、洗い場跡地で、洗い場跡地は現在では駐車場になっています。



旧川越街道の切通しと洗い場跡地

白子川と流域の水環境を良くする会では、登坂車線側の登り口に近い交差点際の側溝で、側溝流水の調査を月1回の頻度で実施しています。ここでは旧川越街道下り車線側の側溝流水の合計に近い流量を測定していることになりませんが、その平均流量は毎秒約15リットル、毎分に換算すると900リットルとなり、これは一般家庭用の浴槽であれば十分に二つ分の水量になります。成増方向行きの側溝流量は不明ですが、上記の値からも白子宿での湧水の豊富さが分かると思います。

図は平成17年～24年の月別平均流量と、8年間の総平均流量との関係を示したもので



す。

図では平均値を下回る1月～6月と、これを上回る7月～12月にキレイに2分されていますが、これは流水量が降雨量に大きく影響を受けていることから、「乾期」と「雨期」に相当しているのではと考えています。ただ年ごとにみるとかなりのバラツキがあり、このことについて雨量や、近隣の地下水位なども含め要因を探っているところですが、月1回の観測値なので容易ではありません。結果については機会があれば報告させていただきます。

これらの側溝の流水は白子川に流下しており、白子川の水をキレイにする意味では非常に貴重な水源なのですが、白子川に流下するまでの間にこの流水を活用する法はないものかと思案をしています。いまだ名案にはめぐりあえませんが、あるお宅ではご自宅の駐車場スペースにこの流水を引き込み、ミニビオトープ的なものを作っています。メダカ、カワニナなどがいて、秋には十数株の稲が実り、これなどはおもしろい活用法だと思います。写真右は今年がやや空梅雨的なので例年より少ない感じがしますが、白子川へ流入する湧水です。



白子川へ流入する湧水

今年4月の観測日には、白子橋と東埼橋の間でアユの大群を見ました。それもおそらく数十匹、近くの溪流釣りの好きな方に確認してもらっていますので、間違いはありません。こんな大群が何処からと一瞬考えてしまいますが、白子川の流末は新河岸川なのでごく普通には東京湾から隅田川を溯上し白子川にたどり着いたものと考えられます。ただ、東埼橋の下には高さ2m弱の落差があるのでこれより上流への溯上は難しいのではないかと思います。以前に板橋区の魚類調査で、投網によりアユが捕獲された話を聞いたことがありますが、まさかこんな大群を目にするなんて想像もしていませんでした。とにかく落差工はなんとかしなくてはと、上流部の同好の方々とも話し合っているところです。

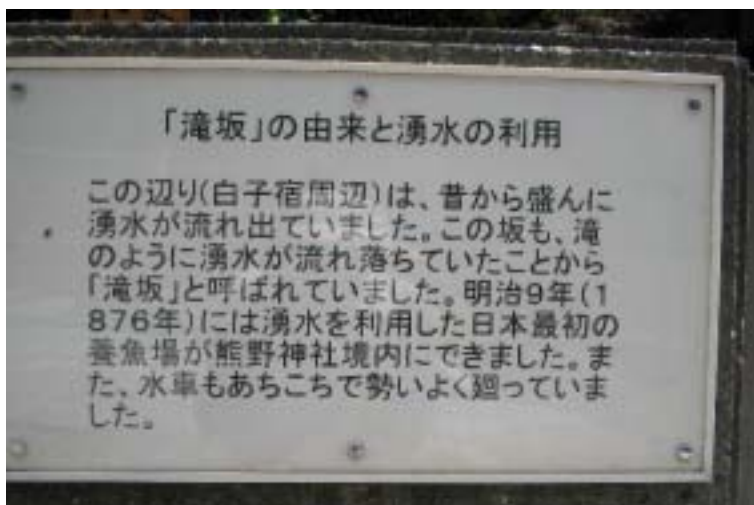
側溝流水の観測地点を南進すると勾配のきつい坂道になります。このあたりを「大坂」と呼んでいます。この道は旧川越街道以前の川越街道で、参勤交代はこの道を使っていたものと思われる。それより白子宿辺りの旧川越街道の開通が昭和5年ごろとされていますので、昭和のごく初期までは大坂を使って行き来していたのでしょう。下の写真は急な登坂道とヘアークーブの大坂ですが、写真右側の台地からはかなりの湧水があります。



大坂の登坂道

数年前にアスファルト舗装の亀裂から湧水が湧出し舗装を壊したことがありました。その際の補修で路盤の下に集水パイプが埋め込まれ、写真に見える人孔に直接排水されるようになってしまったので、以前は写真左側民家の庭先にはかなりの湧水があったのですが、それ以来湧水量は減ってしまいました。また写真でも分かるように、道路左側の側溝はU字型ですが、右側はL字型側溝です。これは道路のカーブの関係で路面が片勾配になっているためとも考えられますが、湧出箇所が台地法面と路面との接合部より深い位置にあるためとも考えられます。

また、白子二丁目には「滝坂」と言う地区があります。白子橋を成増側から白子宿側に渡り、直進して交差点を更に直進すると幅一車線程の急峻な坂道になります。この坂道界隈を滝坂と呼んでいます。以前にはここにもかなりの湧水がありました。次頁の写真はこの地に建てられて



滝坂の由来を記した案内板

いる地名の由来を記した案内板です。

以前、この案内板が立っているごく近くのお宅には、庭に大きな池がありそこに湧水が湧き出ているのを見学させていただいておりますが、このお宅、現在は7～8層のマンションになってしまいました。マンション建設時に湧水がどう処理されたのか不明ですが、現在では側溝に記憶にあるほどの流水はありませんので、下水道の枝幹線

などに直接落としているものと思われます。

以上が白子宿界隈のごく大雑把な湧水情報ですが、もう少し白子川上流方の「牛房」付近にも湧水箇所は幾つかあります。

水は貴重なものであるにも関わらず、湧水も含め多くの場合、とくに土木工事では水は厄介ものの部類に入ってしまうでしょう。しかし、湧水は地下水の性状や地下水位などを探る唯一の観測可能箇所でもあり、湧出箇所は極力温存してもらえようという考え方が一般化することを強く望んでいるのですが、諸般の事情や、効率性を考えるとやはり高望ですね（田中 正安）

## 観察と活動の記録

4月20日(土) 江東区仙台堀川ポケットエコスペース他の見学

4月27日(土) トンボ池のあり方の検討 トンボ池泥さらえを優先して実施することにする

5月18日(土) トンボ池泥さらえ

5月22日(水) トンボ池泥さらえ

5月25日(土) トンボ池泥さらえ

5月25日(土) 総会 トンボ池再生案

5月29日(水) トンボ池泥さらえ。4日間で成果は3分の1くらいか(写真右)

6月5日 板橋区長宛て、トンボ池の再生について要望書を提出

6月8日(土) バッタ広場植生調査 チカラシバが生えていたところにカゼクサが増え、チカラシバは樹木の際などに後退?

6月15日(土) 梅雨に入りトンボ池満水。アカミミガメ大2, 小1, カルガモ、オオカナダモらしい水草投げ入れ。

バッタ広場樹木切り詰め、ササ刈、セイタカアワダチソウ、ブタクサ、オオマツヨイグサ、増



えた観葉植物（アイビー）の抜き取り、南側ドクダミ繁茂

## 6月22日（土）成増1丁目向新田の森の観察とササ刈・野草の移植

ここは2008年隣のマンションができたときに、区に提供された緑地です。その前はマンション敷地とつながる森でした。建設にあたり住民や市民団体の要望も入れ、開発地に生えていた植物を移植し、落葉樹は若い木も残し、常緑樹は伐採して整備し、成増1丁目向新田の森として残されたものです。2010年には



じめて中に入り、2012年春と秋に控えめなササ刈をしました。今回も頭上はすっかり木が茂り、ササの生育もさほどではなく、それでも刈ったササの下から今年芽生えたケヤキ（葉が4枚）の他に昨年芽生えたケヤキが出てきました（写真上）。森がどうなっていくのか、様子を見ていきたいと思います。ササ刈の他に、野草の一部をもう少し日があたる林縁に移植し、侵入したオカメツタ、トキワツユクサを抜き取りました（写真下はササ刈前と後の様子）。



## ビオトープ池について板橋区長宛て2回目の要望書を検討しています

ちょっと見ただけだと、トンボ池には「何もいないじゃない」と思います。ヒキガエルも3月の産卵のときだけしか池に来ないし、運良くオタマジャクシになっても5月にはいなくなってしまう。トンボは夏になればやってきますが、それだけです。そうそう、スズメバチはよく池に来るし、野鳥も人がいなければ水浴びに来るかもしれません。

もし、コイ・カメ・ザリガニなどの強い生き物がいなければ、何もいないように見える池にも、池底にはヤゴがいて、ヤゴのエサとなる小さな水生生物（ボウフラなど）がいます。まわりのさやかな草むらには虫もいます。私達には見えなくても、生き物達の世界が展開しています。そういう小さな生きものたちの世界に立ち入らず、認めるのがビオトープ。行政も区民もトンボ池をビオトープとしてきちんと認めてほしい。主旨看板の設置、PRの徹底など行政の役割は重要です。私達もビオトープのあり方について検討していきたいと思います。

# 活動のお知らせ

**運営委員会**：8月24日(土) 9月28日(土) 12:30~13:30

作業・観察会の後にラーメンしらかばで報告や活動内容などを相談します。

連絡先；坂本(090-4618-1295)

**会報の印刷・発送は奇数月。お手伝いできる方はよろしく**

日時：9月21日(土) 12:30~

**活動の問い合わせは事務局 瀬田(3969-7124)まで**

## 活動予定いろいろ

### 1 赤塚ピオトープの観察と環境整備(雨天の場合は観察とゴミ拾い)

いずれもトンボ池前集合。

暑い時期なので無理をしないでバッタ広場のササ刈と湧水水路の環境整備を適宜実施します。飲み物と湧水水路の場合は長袖で虫よけ対策をして下さい。なお、トンボ池は湧水水路に至る前に漏水していることがわかりました。猛暑の中なのでヘド口除去作業はやりません。よろしくをお願いします。

7月27日(土) 10:00~12:00 バッタ広場ササ刈(または湧水水路)

9月21日(土) 10:00~12:00 バッタ広場のササ刈(または湧水水路)

9月28日(土) 10:00~12:00 バッタ広場(または湧水水路)

### 2 バッタ広場のバッタ類の調査(どなたでも参加できます)

8月24日(土) 10:00~12:00

集合場所：トンボ池前

持ってくるもの：飲み物、あれば図鑑、昆虫網(バッタ類は手やポリ袋でも採取できます)

### 3 日暮台公園樹林地の観察プラス(樹林地内の推移と林縁植物を観察、様子を見て林縁の草取りなど)

8月3日(土) 9月7日(土) いずれも10:00~11:00 日暮台公園前集合

**ピオトープ管理のボランティア大歓迎**

生き物のすめる水辺(トンボ池)や草地(赤塚公園バッタ広場)などの管理作業を応援していただけませんか。

大きくなった木を切ったり、セイタカアワダチソウなどの外来植物や生育旺盛なササを刈り取ったりしています。

あなたも会員になってください(年会費2000円：振込先は表紙に記載)